20 越ヶ谷宿～粕壁宿

埼玉県春日部市
藤塚橋 ～ 八坂神社
（ 歩行距離 1896m 24分 ）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp

郷土資料館日光街道模型

③郷土資料館
粕壁の町は宿場町（しゅくばまち）として栄え、江戸時代終わりごろには粕壁宿（現在の粕壁地区の範囲）には3700人余の人々が住み、773軒の家々が軒を連ねていた。宿場町では、通行者に馬や人を提供したり、本陣・脇本陣や旅籠など宿泊施設が整えられた。参勤交代の大名や、松尾芭蕉などの多くの旅人が日光道中を通り、粕壁宿で休泊しました。
常設展示では、江戸末ごろの粕壁宿推定模型や道しるべ、河川工事や宿助郷に関する古文書などを展示している。

八坂神社手前交差点

②東武鉄道野田線
当初は野田市駅から柏駅まで醤油を運ぶ貨物輸送のために建設された。かつては野田市のキッコーマン本社内に運搬用の駅が存在し、柏駅からは日本鉄道（現・JR常磐線）経由で日本全国に醤油が輸送されていた。昭和60年（1985）3月14日の国鉄ダイヤ改正に併せて貨物輸送が廃止されるまで、柏駅東武1番線（旧8番線）の場所に貨物列車用の引き込み線が設けられていた。

coffee time

粕壁か春日部か

「東鑑に春日部甲斐守実景（さねかげ）と云ふ者、三浦泰村と謀りて北条氏を亡くさんとし事成らずして死す。其後裔時資（ときすけ）、新田義貞に従ひて勲功あり。後ち名和長年と共に亡びる云々（しかじか）と見えたり。去れば粕壁の駅名は即ち春日部の訓読に由りて、後世今の実に書換へたるものなるべし」（日本名勝地誌　明治27年 1894）
粕壁の宿は、江戸初期までは葛飾郡の粕壁であったが、その後、埼玉郡となった。昭和19年（1944）粕壁町と内牧村の合併時に春日部町と改め、昭和29年（1954）市制施行で春日部市となった。

coffee time

町屋

商人や職人の住居だが、職種や階層などでかなりのちがいがある。町屋の一般的な特徴を挙げてみよう。

1．道路に面して直接出入り口を設ける。
2．瓦葺きの切妻造り、平入りが多い。3．正面は開放的、格子を構え、蔀戸（ししみど）が多い。
4．中二階建て、虫籠窓（むしかごまど）・連子窓（れんじまど）をつける。
5．間口が狭く、奥行きが深く、通りに土間に沿って片側か両側に部屋が並ぶ。
6．表に店を構え、座敷・居間は奥になる。
町屋の敷地は、間口が狭く奥行きが深いので短冊形で、よく「うなぎの寝床」といわれる。道路に面した母屋には店・中の間・座敷が並び、奥に台所・便所・風呂場や蔵などが建つ。間口が狭いのは、間口の大小で町役（税金）がかけられるからである。上層の町屋では道路に面して門構えのある塀や蔵を建てるものもある。
屋根は切妻で平入りが一般的である。密集した町屋で軒を切妻にすると、雨水が隣家との狭いすき間に流れ落ちて始末が悪いから当然のことで、平入の妻側にうだつや袖壁をつけることになる。勢い平入の軒がほぼ水平に連なった街並みの景観が見られることになる。

①東武鉄道一ノ割駅
この地域は、古くは下総の国に属し市野割村と呼ばれていた。江戸時代に広く行われた割地制度の遺名で、「地方凡令録」によると、水魔の地や新田場のある土地で字(あざ)がなく、一ノ割・二ノ割と分けておいて、田所に甲乙のないように計ったそうです。大正15年（1926）の駅開設時に、地名から一ノ割と命名された。

coffee time

粕壁 地名の由来

「かすかべ」の表記は何度か変更されている。南北朝時代（14世紀）、新田義貞の家臣春日部氏が当地を領地としたことから「春日部」の地名が生まれたとされるが、その後江戸時代正保年間（1645年頃）には糟壁、糟ヶ辺という表記が交互で使われており元禄年間（1700年頃）に粕壁、糟壁と記す漢字表記が明治初期あたりまで交互に使われていた。高橋至時・伊能忠敬らによる大日本沿海輿地全図では粕壁と記されている。明治期に大区小区制を施行してから粕壁という漢字表記に統一した思われる。東武鉄道の春日部駅も開業時から昭和24年（1949）まで粕壁駅という漢字表記で使われていた。昭和19年（1944）に南埼玉郡粕壁町と同郡内牧村が合併した際に南埼玉郡春日部町とし、表記を改めた。

日光道中粕壁宿～近世～

天正18年（1590年）に徳川家康が江戸へ入り、関東地方の大半を治めるようになると、市域も大きく変化します。事実上の首都となった江戸と、日光および東北地方を結ぶ日光道中・奥州道中が整備されました。市域にも日光道中（にっこうどうちゅう）が通り、粕壁の町は宿場町（しゅくばまち）として栄えました。江戸時代終わりごろには粕壁宿（現在の粕壁地区の範囲）には3700人余の人々が住み、773軒の家々が軒を連ねていました。宿場町では、通行者に馬や人を提供したり、本陣・脇本陣や旅籠など宿泊施設が整えられました。参勤交代の大名や、松尾芭蕉などの多くの旅人が日光道中を通り、粕壁宿で休泊しました。また、江戸時代には河川や農業用の水路の整備が進み、多くの新田が開発されています。寛永17年（1640年）ごろには、江戸川が開削され、江戸川沿いの西宝珠花（にしほうしゅばな）、西金野井（にしかなのい）などは河岸（かし）として栄えました。河岸とは、船着場、川の湊のことです。年貢米や農産物、肥料、生活品などの荷物や旅人乗せて、江戸と河岸を結んだ船が発着し、にぎわっていました。

4 粕壁宿

粕壁宿は、江戸時代に整備され、栄えた宿場町の一つで、日光街道の江戸・日本橋から数えて4番目の宿場である。
現在の春日部駅東口の旧街道一帯が、かつての粕壁宿である。 宿駅として成立したのは元和二年（1616）。古利根川を通じて、江戸と結んだ物資の集散地として栄えた。尚、江戸・日本橋から一日歩き通すと、ちょうど1泊目となる宿場町がこの粕壁であったことから、旅人の多くはここで宿を取ったようである。 天保14年（1843）の「日光・奥州・甲州道中宿村大概帳」によれば本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠45軒、問屋場1ヶ所、家773軒、人口3701人（男1791人、女1910人）、駄賃・賃銭は荷物一駄・乗掛荷人共88文、、軽尻馬1疋59文、人足1人45文で規模は23宿のうちの6番目であった。 街道沿いには青物店、穀物店、精米・精麦店、飲食店などが建ち並び、4と9のつく日には六斎市が開かれ、地域経済の中心地となって発展した。 近年の急速な都市化でかつての宿場町としての面影は薄くなっているが、当時からの商家もいくつか残っている。